

「恐怖！巨大殺人電気クラゲ！」

—初稿—

2026/3/19

〈人物表〉

倉田 祐介 (35)

海の家店主

北嶋 花香 (27)

海水浴場の監視員

葉山 海 (38)

海洋学者

百田 康二 (30)

葉山の助手

原田 龍臣 (17)

海水浴に来た高校生

久山 亮二 (59)

市の観光課長

1. 久里浜海岸海水浴場（昼）

夏真っ盛り。燦々と照りつける太陽。  
多くの海水浴客で賑わっている。  
海の前には若い男ら、客引きに躍起。中は焼きそば、イカ焼き、かき氷など楽しむ客で一杯。

2. 海水浴場の外れ・遊泳禁止エリア（昼）

海水浴場の外れにある四、五メートル程の小高い岩。高校生の男女グループ、岩の上に登っている。その一人、手を挙げ、海へ飛び込む。水飛沫。すぐさま海面に顔を出し、仲間に手を振る。歓声。  
花香の声「（気だるそうな声）ちょっと、そこ遊泳禁止―」

3. 海水浴場・監視デッキ（昼）

北嶋花香（27）、サングラスと派手なビキニにパーカーを羽織り、パラソル付きの椅子に座っている。メガホン片手に双眼鏡を覗き、気だるそうな声で、  
花香「飛び込みも禁止―」

4. 海水浴場の外れ・遊泳禁止エリア（昼）

高校生たち「いっちゃえ、いっちゃえ」  
高校生たち、花香の声に一瞬たじろぐも、意に介さず次々と岩から海へ飛び込んでいく。

5. 海の中（昼）

無邪気に海に浮かぶ高校生たちの姿。  
その様子を水中から眺めている何者かの視線。

6. 海水浴場・監視デッキ（昼）

花香の双眼鏡には、次々飛び込んでいく高校生の姿。  
花香「……禁止ってば」  
祐介の声「禁止されっから、やりたくなんだよ」  
双眼鏡を外すと花香の背後にはいかにも海の家という、アロハシャツに海パンの倉田祐介（35）。

花香 「知らないよ。どうなっちゃっても」

祐介 「どうなっちゃうの」

と、花香のパーカーを軽く脱がし、肩に手を置く。

花香 「んー、濡れちゃったりとか」

と、祐介にエルボー。祐介、慣れた手つきでかわし、懐から日焼け止めクリームを取り出す。

## 7. 海水浴場の外れ・遊泳禁止エリア（昼）

海の中には数名の高校生ら。

高校生 「おい龍臣、早くしろよ！」

岩の上には、原田龍臣（17）。残るは一人だけ。

龍臣 「うるせー、今行くってんだよ」

ビビって躊躇するも、意を決して飛び込む。水飛沫。

## 8. 海の中（昼）

龍臣、海の中でぎゅっと目を瞑る。

何者かの視線、さらに近づいている。

## 9. 海水浴場の外れ・遊泳禁止エリア（昼）

龍臣、なんとか海の上に顔を出す。

皆、あまり見ておらず、泳いで浅瀬へ移動している。

龍臣 「おい、待ってっ」

龍臣、不慣れな泳ぎであわてて追いかける。

## 10. 海の中（昼）

龍臣の不恰好なバタ足。

その背後、巨大な透明の触手が龍臣の足を掠める。

## 11. 海水浴場の外れ・遊泳禁止エリア（昼）

龍臣、はっと気づく。何かに足を取られた様子。

龍臣 「ちょっと、た、助けて」

皆、気づかずはしゃいでいる。

ビリビリという電気音。

12. 海水浴場・監視デッキ（昼）

花香 「海の家の方が退屈しなかったかも」

と、寝そべったまま双眼鏡を覗いている。

祐介 「バカ言え。搔き入れ時で今頃バイトは大忙しだぜ」

祐介、花香の背中に日焼け止めを塗っている。

花香 「じゃあ、なんで今こんなことしてんの」

祐介 「いーの、店長だから」

花香 「何それ」

祐介、花香の水着のホックを外す。

花香 「ちょっと」

祐介 「……いいじゃん、退屈してんでしょ」

花香 「……まあ、そうだけど」

祐介 「え、ここ、禁止？」

花香 「ん、禁止、かも」

祐介、ニヤリと笑い、花香の背中に手を伸ばす。

と、海の方から悲鳴。

高校生の声 「きゃあああ」

祐介、花香から双眼鏡を取り上げ、覗き込む。

13. 海水浴場・浜辺（昼）

浜辺に仰向けの龍臣、意識がない。周りに人ばかり。

高校生の一人、心臓マッサージ。騒然とする人々。

龍臣の足には何か巻き付いたような黒焦げ跡。

14. 海水浴場・監視デッキ（昼）

祐介、事態を察するや否や、浜辺の方へ一目散に走り出す。打って変わり真剣な表情。

あっけに取られ花香、体を起こし浜辺の方を見る。

ややあって、ようやく気づいて胸元を隠す。

15. 海水浴場・浜辺（昼）

祐介、高校生に代わって懸命に心臓マッサージ。

しばらくして龍臣、水を吐き出す。安堵の声。歓声。

その少し外れ、透明な円柱状の物体が打ち上げられ

る。大根ほどはあろうかという大きさ。

## 16. 丸バツ大学・葉山研究室（昼）

所狭しと置かれた水槽。中には様々な種類の魚。その一角、葉山海（38）がカップラーメンを啜りながら誰かと電話中。

葉山 「何？ 久里浜海岸？」

言われるがまま、PCでSNSを検索。

画面には先ほどの浜辺で心臓マッサージをする祐介をスマホで撮影したと思しき映像。

一時停止。葉山、龍臣の足元の黒焦げ跡に注目。

別の投稿、漂着したとされる透明な円柱の画像。

葉山、ラーメンを啜る手を止め、目を見張る。

葉山 「……分かった。すぐ向かう」

と、電話を切り、ラーメンを飲み干す。

助手・百田康二（28）が台車を引いてくる。

百田 「先生、電気ウナギの並列接続、五匹に増やしました。実験準備完了です」

台車の上には巨大水槽。中には五匹の電気ウナギ。

頭と尾が電極と電線で並列に繋がれている。

PC画面に釘付けの葉山、聞いていない。

百田 「今日はサユリが機嫌悪くて手こずりましたよ。すぐ電極外しちゃうんだから」

壁には電気ウナギの写真。「サユリ」「エリ」「レイナ」など一匹ずつ顔と名前が貼られている。

葉山、バツと立ち上がって、

葉山 「実験は中止」

百田 「ええっ」

葉山 「フィールドワークだ。久里浜行くぞ」

と、荷物をまとめ、研究室の外へ。

百田 「せっかく繋いだのに。あ、サユリ、こら」

水槽のウナギ暴れ出す。電極が外れる。

百田、慌てて水槽の中に手を入れた途端、

百田 「ああああああああああっ」

17. 海水浴場・規制線の前（昼）

遊泳エリアの前には規制線。

クールビズ姿の市の観光課長・久山亮二（59）、

「遊泳禁止」の立て札をハンマーで打ち込む。

規制線の前には大勢の海水浴客。落胆の声。

祐介 「おいおい、冗談じゃねえぜ」

久山 「お客さんの安全あつての海の家だろ」

祐介 「こっちだって生活あんだよ」

久山 「分かってる。一週間もあれば再開できる」

祐介 「一週間??？」

久山 「ヤツが浅瀬に入つてこないようネット設置すんだよ。お前らにも手伝ってもらう」

祐介 「でもそれじゃ花火大会に——」

職員の声 「いましたー」

と、浜辺から規制線を潜り抜け、ダイバー姿の職員がバケツ片手に久山の元へ。

二人、バケツを覗き込む。

中には手のひらサイズの小さなクラゲが数匹。

祐介 「電気クラゲだろ？死ぬような毒じゃない」

久山 「だからって放つといて良い訳ない。足がつかない所で刺されて、驚いて溺れるってこともある」

祐介 「あれは元々遊泳禁止の場所で……」

百田の声 「ちよっと先生、待ってくださいよ！」

18. 海水浴場・浜辺（昼）

と、祐介の目に、葉山と百田が規制線を潜り抜け、浜辺を探索し始めるのが見える。

19. 海水浴場・規制線の前（昼）

職員 「まだまだコイツ、結構いるみたいです」

久山 「なんでまた急に」

職員 「多分、バラスト水でしょうね」

と、港の方を指差す。

20. 久里浜港（昼）

浜辺から見える港。一隻の巨大なコンテナ船が停泊。職員の声「発電所の改修資材をアメリカから持ってきたとかで、先週から停泊してるそうです」

祐介、双眼鏡で船を見ると、コンテナの荷下ろしが行われている。船尾の煙突には「Burgess」の文字。停泊している岸壁には人だけ。「バージェスは出て行け」「日本の電気を盗むな」などの立札を持った市民らの集まりが抗議活動をしているのが見える。

21. 海水浴場・規制線の前（昼）

職員 「クラゲくらいじゃ、文句言えないっすよ」

久山 「もはや、バージェスのお膝元だからな」

祐介、葉山らを見て、

祐介 「……なんだアイツら」

22. 海水浴場・浜辺（昼）

葉山、透明な円柱を見つけ、手袋をはめる。

百田、写真を撮る。

23. 海水浴場・規制線の前（昼）

久山 「……構うな。丸バツ大の変人教授だ。なんだか海の研究してるとかで、ちゃんと市に申し出はしてる」

と、葉山らと会釈。

葉山ら、透明な円柱を持ち上げようとして難儀。

祐介、その様子を見つめている。

24. 市立病院・龍臣の病室（夕）

龍臣、ベッドで眠っている。

葉山と百田、龍臣の足にできた黒焦げ跡と円柱の太さを重ね合わせ、ピッタリであることを確認。

葉山 「……一致する」

看護師、それを止めようとして、

看護師 「やめてください。意識が戻るまで面会謝絶です」  
祐介、病室にやって来るなり目を丸くして、  
祐介 「な、何してんだよ」  
と、一緒に葉山らを取り押さえる。  
葉山 「もうちょっとだけだから！」

## 25. 市立病院・廊下（夕）

三人、廊下のベンチに座っている。  
百田 「なるほど。命の恩人というわけだ」  
祐介、頷いて、  
祐介 「……だから一応、見舞いに来たんだけど」  
葉山 「素晴らしい！」  
と、祐介と握手。やけに興奮している。  
葉山 「君のおかげでサンプルが灰にならずに済んだ」  
祐介 「サンプル？」  
葉山 「私の仮説を強固にサポートする材料が得られた」  
百田 「先生、試料の分析ですが」  
百田の手にはスーパールのレジ袋に入った透明な円柱。  
葉山 「ああ。ラボに戻るには少し遠いな」  
百田 「近くの研究施設を借りられればいいんですが」  
葉山 「なに、大した設備はいらない」

## 26. 海の家（夕）

客はおらず、閑古鳥が鳴いている。  
花香、キッチンでイカ焼きを焼いて食べている。  
と、祐介が帰ってくる。  
花香 「おかえりー」  
続いて、葉山と百田も入ってくる。  
百田 「研究へのご協力感謝いたします」  
祐介 「タダで貸すじゃねえ。こっちも商売あがったりなんだ」  
百田、テーブルの上に手際よくブルーシートを広げ、  
袋から例の透明な円柱を取り出す。  
花香、生臭い悪臭に顔をしかめる。  
葉山と百田、ビニール手袋を手にはめる。

祐介 「なんだよ、これ」

葉山 「おそろく、触手だ」

祐介 「は？」

葉山 「こちらが先端で」

と、円柱の先細っている方の一端を指す。

葉山 「こちらが根元」

もう一方の端は、輪切りにしたような綺麗な断面。

葉山 「巨大なクラゲの触手の断片と考えられる」

祐介、一笑して、

祐介 「おいおい、ダイオウイカじゃねえんだから」

葉山 「ダイオウイカより大きい。推測するに全長は二十メートルを優に超える」

祐介 「なんの話だ。今からこいつを焼いて食おうってか？」

花香、串に刺さったイカ焼きにがぶりと噛みつく。

葉山 「私は最初、これがあの少年の足に巻きつき、抵抗されたことで千切れたと考えた」

葉山、花香からイカ焼きを奪う。花香、かじったまま離さない。無理やり引っ張ると、イカが千切れる。

葉山、歪に千切れたイカ焼きの断面を見せる。

葉山 「しかし筋肉が自然に千切れたならこのような断面になる」

花香、恨めしそうにイカを飲み込む。

花香 「じゃあ、襲ったやつは別にいるんだ」

葉山、頷いて、

葉山 「これは刃物か何かで人為的に切断されたと考えられる」と、触手の断面を指す。

## 27. バージェス発電所・外観（夕）

夕陽に照らされ燦爛と輝く海面と、沿岸に位置する発電所。壁面の「バージェス電力」の文字。

発電所からの廃液が海に流れ出ている中、小さなボ

ートを漕いで進む葉山、祐介、百田、花香の四人。

葉山、海面から何か拾う。先ほど同様の触手の断片。

同じ長さの断片が幾つも発電所から流れ出ている。

（おわり）